[illegible]惠名目解

へ 5
2220

門へ 利5 雑 巻 3220

藤野潔氏寄贈 昭和[illegible]年四月廿四日

宮城図書

序

誹諧の名は古今和歌集よりおこりて其門に
古人有しと貞徳しるしおし句十ケ条を
残しは継仕たる我翁芭蕉の志をつぎて先翁に倣
ひめてすゑむしろの姿にあつまりの高弟十子
その外法をつたへ流れしまゝ枝の数をしらん
されとも華麗に桃桜ありつ人々して角蕉を
とゝのへたる汎深浅厚薄意味深長の秘妙を
見えこの句をえらひしとなんひしとや志をあつめ
今翁の句として人々秘蔵し傳へきたるを記実

藤野潔氏遺愛之記

或対雅用曲節字眼玄妙の法なく風流の本様
さてゝ末にすたれし里ぶりを我をといへる名あめて
その意をしる人は蕉翁頼みしに今雪中庵
蓼太は其師嵐雪の正統支登光樹の真実にして
明嵐雪は嵐翁を附属し蕉門の本意たる彼
光樹の正風をしらしむ其肩を並べ筆勢十分を挑
こゝにおのれその年月筋ひ来る好士は実績を折る
方我附すは行まくも我も耳を好み眼をも
師翁の蓮池のほとり附く未来の庵をむすび揮の向
めしゝ庵しくも昇く名を取りる者為れ也

象は楮の火まを蛍のをおもひし人無住の
しつか志も蛍や楼の子代隠をさる松風もめし
冨士の雪もろしくし月花は旅に投ぬる家業
寺とおもひし文を宮寺の縁に寛平延喜の
昔のしたまの日あけたる佐藤の塚の子屈として酒を
好み問ふ者も語らひく胡上の里の草陰にらと
かくやと想像し文古城跡の形残りて田畑と
井に古墓苔むし古戦場のあのさ度して苔を
僅し 捨人の身もかく治まる御代の恵をたる
さしとも郷こひかくまで附しく我ぬせしよそも

翁の生涯ハ西行宗祇の跡をしたひし人なれは京
さくら花みにとたつねに嵯峨の花と瀧母
こゝろはしひ長谷みやこ人のゆかしきやまふかく
附るに此翁の鏡若をとゝめし秋の月なん〻わする〻
なかりし人を伴ひ無ふの跡のおらくに敢の跡しきはや
鶴鶴をはすゝ史書の如見ゑん時しほこ来世のたね
こいのは紀に伝えしあることに自生の一本なり今に
こゝに丸し蕉と呼ひし故あるのなしりけこゝに
民家の屋こ丸辛苦のとこひより丸ハこの郷より
不りこゝに丸蕉の古きちしまりしふるたふとき

事ほくく書あつめんとして桂藤のちうまんちうもの
なりくやをと一百句をりたまりのそのゆゑ書
うつりを我世とかぬなりし文のちの世の好士の
見むとけりともあらんやまむなしく上はたて
かくてこにとり我此の心して書付侍る

宝暦七のとし霜月

楚水

芭蕉翁句解

雪中庵蓼太述

蓬莱にきゝてや伊勢の初たより

慈鎮和尚の哥に　此ほとはいせまてしる人の音信て便
うれしき花柑子　此歌よりつゝけるか此文字也
常の人さへ用ひて座候さへ蓬莱と飾置せしとも真
例乃風流にして柑子極めて蜜柑の紛ひ多けれ
ハ此国の菓にあらすの初便るく徹して一字を
増座して此一字を職して座しハさりし座し

年〻や猿に着せたる猿の面

猿ことに六窓一猿猴の如しと画にかき出し人の心の彼に
うつりて見えり定まらぬ生死無常のありさまをうつし画き
猿にきせたる面もせよといふに老とも若きともいふへきにしくる
この句は観想なりける悪意大師七猿の如し
浮くしと浮世は中々是不知をもてあそひける事を歎きける
見えて見よいふとも十八さればとの世の浮世の中にすくる事ありて
浮世を寄すくいふなさるとてそれか世は定めなき世と見えたる
御事も見れたこと年にむかしや見さるよりさる事ハあはれなり

ゆゑハ翁もおこる猿も年々にかはりなきと実無きる獣類
のみにあらす人のうへにも世にありてかゝる人のあはれさをいはれたるにや
見るにきこえぬ作者のみの心猿ならぬ人のさるにも似たる猿の面
哉人云芭蕉翁生辰後光明院の御宇正保元年甲申
なし此年にありし此頃俳諧にて知られし文許六風俗
文選直指の注にし伊賀国上野に居住し猿の面を作りし
年のその比にあらし此誌せる芭蕉翁の伝記に作者の名を記す

猶猿にてはかりし何かの事に似たるの意

大路長峯が伊賀の国にあらせさる猿の面を写して光源氏の神の立し中に納めたる

衣冠優婉の縁あるひ合せりてかの越後あ　須去れ
松浦杜風猶しに声をけ汁て渋ふ浪澄激御出の様也
称しけるの編に帰と八句有余の老翁の趣なれとの鶴の
帽子紫檀の挟りけるに席に臨て松下の嶽にて登て嘯き
意見して和漢ともなかりて若さ客て松風折ゝ声
めてたき夕暮を見給ひ絶さし　中略　此めてたるくさをあ
とうちを待せられの

　　誰人の旅まくら花のかほ

孫晨字元公家貧織席為業明詩書為京兆
功曹冬月無被有藁一束暮臥朝收

　　仙人しや我年瓢耳の藤

深川芭蕉庵にして耳の藤なる瓢を狼しむ
是も附門人のよ文芭蕉によりてまうしし望に應て之をとし
瓢銘山素堂　一瓢重黛山自笑称箕山莫慣
首陽餓這中飯顆山

　　ものひとつ瓢はかろき我世かな

芭蕉翁瓢の文ありの略して今東武深川の家に此瓢

かゝる文政集にしよありしも新年ゆゑ文采
窓年々月や新年ふて風采窓と成けるの句に
成ぬるに

子良館の後に梅ありけるとて

御子良子の一もとゆかし梅の花

おりしも旅立ふ御子良子共の古神官の
神饌を奉仕しるあり女房生を据し
志むけ所を子良の館といふれて神前
梅常なれハ此今あるとや

むかし若葉梅のこの前の碑付

此一葉を以明大津よりの来行の俄何おも里梅若葉を
青向の立玉して風の風流さうしそさいふ事を
こりかしけ文を綴けりさむらの娯めして紫臭
此女の表とも動事にて見色にまし光斎旅の一棒やせ
見すへし　此者に説明　口受

おんも早ふりかなき賞る若葉にし

拾遺抽の大寄　世にも先生は表のあなるのをかつら

こゝや見渡し萬葉集にて書清らを發たまり
せりやうたかひて茂りたまる菟蕪の立命にて花も組て萬の葉
摘むとあふのさかれハ菟蕪乃初春めくさまなりと織合
なれ氷めして古體乃粉骨をせんへし

鶯も謡りし眠りも嬉しや哉

荘子齊物論曰昔者荘周夢ニ為ル胡蝶ト栩々然トシテ胡蝶也此
ことおふ夢を見し垣根の柳乃眠をさるかとしたる真に
白日りし佐たらは胡蝶乃夢ととき荒ひ来へきを驚して
飛ひし大なるを彼坂本めして旅するに清らかハ飛きて

いへる胡蝶の荘子なりし

なりけのふ柳のさいの日まちへつゝ

此句許六か序旅法師よ去ぬりのめさる柳乃古き人歟
と書せるなる後の短冊を而ねもの諸集によせる本の柳の
さまなる志すへられハ谷と続て梅とておなさまなる柳
とくさむ乱れの葉めしく柳のさまなるを例のめ無葉の将
昔とも見えしかの此句法玉連環休と受めしく清経連環をも示
此年ふ葉下る此事めし　東坡喜禅集寄内静思伊
久陽帰朝憶別離時聞漏轉これ連環の絶ことなかりしめ

大日経や しるべ行様し 一處

一休禅師叡山に登りたまひし時元徳等大字を
書しけるを禅師坊下北里へ送りけるに紙を継ぎしの
字残り様に存ひし とそ

二月十七日弥勒山を出て

探梅はまし夜更見れけりしあれ

此日より増賀の傍を過るといふ洞云ふの此上人名乃の
なひ深く御墨吉神文よりて名残ありて名利を捨しの

示現を蒙りたまひし小継夜詣乞食して脱で来探
ありしよなしかひとのを撰集抄に記されその出様を
みるにかりそめにも二月の晦日をしたふ
なごりある此雑志なる文章

二月堂に籠りて

水とりや氷の僧の沓の音

此水取りと云事は毎年集行の二月堂に
錦日より小観音にかけて此行法二月朔日より七日まで
なる此日堂前の石井より若狭より遠敷大明神の御供

走ル跡せし男人たはんは浦出ぬ時けは夜ごと霊前を見え
ける汎を二月豊州ならしめ之置

高野まく

又册れ去年のに忘し絲子娘声

良兼酒匂の館に住みしか其頃は山田志娘子の歌

又なやみけん册になし尊此縁にそれなれ

悼　呂九

當帰よりの何なをも八塚乃菫かな

呂九も出羽に旅せし時橡屋主人なる何の旗亭に於て
一段武蔵の深川に住居し後華洛の地を好みに年ぐを
歸りて衣更忘れ旅中めしく黄泉の客と成るを皆ぶ
しくふ當帰ハ唐の白楽天の詩に蘼蕪蕪モ亦是王孫草莫送下
春香入上客衣ニ蘼蕪一名當帰此二字當帰と讀む文わ
橡よありし妻のまよふ閨情の題の詩也家の西海の二字是を
摘そのすりん又楚辭九歌曰悲莫悲兮生別離樂莫
樂兮新相知これらを折してまて當帰乃ある汎傍を
かなしきハなりし汎を此死別をとぞまりしと又えなべきふ
思案すりん菫草を塚に種てし此歌捐せまく哉かし

老慵

蛎よりは海苔をば老の売もせで

山家集の雑の部に串にさしたる貝を商ひけるを
何とて同しくは蛤をと干て得るならむ二十日やさくもて
おもし見ハ蛎をさしてさして干もさしてよ蛤よりハ名も
便ありけるしるしに蛎のみ看経の寓もあり浅ましき
趣のあさましく便ありて猶日なれやし文此句
この奇特一段さりけりて蛎よりも海苔の法の
訓もありとなん

葛城山の麓を過る

猶見たし花に明行神の顔

岩橋の麓に纏ふ(?)明日をしらぬ葛城の神
此縁にふれたる葛城の神を見目あしとこの世の人の口さか
なくも伝へ侍れとはいかにもかくも猶見たしと御心に
の詠したまへる花の色(?)にも岩橋を渡の優婆塞の姫見

何宗院と花にまかせて馬に鞍

花に暮て去(?)もといへし山里の伴を求めよ高に鞍かな

此音の調を撫く何葉琵の波里真似はしもりかれも

疑ふしくまへて見る中の威風ともいふれけるとも

ちる花や香をも鏡も琴の塵

是は梁塵の画賛也　劉向別録曰　魯有善歌者虞

公發聲清哀拂動梁上塵　その人の歌の時の梁上の

塵をも飛ばすといひしことなり此琵琶の音も飛塵を揺らすべし

まだ考へ侍る思ひのうちなる

此句は推せよ　疑ふべし　又案一具

春風や夜ぞ立ちける秋草世の中に生きて居も合せん

と念ふに頭ひねりて以呂も合せ終りし言葉の一句と

見ゆ侍

よしなし

山さくら尾ふくよの花ゆかり

此事は仏をも許すこともいふべき理を

深くおもひ意を尾華ものをとどむる事ありこの

句はこそ味ひきこしうるも花ゆかりともいふ一

これ詞も妙をさせ候ておもふべし

布袋の賛

ものほしや袋のうちの月と花

為先庵御芭蕉集指月布袋の讃にして　大空を
さし指月の光とかれて月雪花を袂の袋に句をまとめ
世情をしひて世の禅味といふ也

陽炎や柴胡の糸の薄曇り

柴胡の原地名と覚えたる説多し　柴胡ハ薬草也
河東柴胡なりといふなれども此見るべし　今日の芭蕉の眼前躰也

湖水

行春を近江の人とおしみける

難波山寺は鼻紐を翻し尤も春の人と惜しむと
春を惜むなど湖水の眺望や此句を情となれば出せる集
あり　一句の情はなしといへされば去ほど惜むなれ
云の紗綾の日庵し　帰るに至りて古帰へ
桃青言なりし　和哥の浦也追付をけり
能き格の事を古集に入るなり　寂の海のやうな成らん

この絶を指しさる上にし 海ニ和絶ル陶き山色遠合空

海明先見日ル瞻望しくて玉津嶋の瑞籬清見荒磯を

情もへ宿の地ゟりされて遊月ゟりのことにちりうるにて

浦山の風色よ光を持を取る所まずとハいふへし

いせめく

沙祖やあひとりけさて涅槃縁

今葉集 沙祖のあとりと見てきてなきさかむひ

もらけぬ船の音らしく世のなかにかよひなる

無常迅速の句情深し

かしまばむ月は梅ル籬の里

袖白純りしに此句法蓮華経を起さわかり出せりときしく

門人來末続ある師の句を来うせり籬の盤を夜更て

流の字色めくも日用の思ありは山家集に

時鳥又來たりし古里にゆかし梅の花盛りし 鶯の声

待たのもしこの古りあしり いかのくの里

時鳥啼しや人おんあやめ草

郭公啼や五月ルあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな

此歌ふれなれおや詠草の此よみ人哥成ふ注の撰合り
して宮人の二字を六月志賀を越しおりしよき心ありの余情ハ
西行の時の川なき君よし后同法師の趣を宮人の心か
なし此歌撰なき人殊に通へしを云る事あり

奥州武隈松かし

桜より松は二木を三月越し　翁

奥細道に桜より松はふ元禄二年弥生末七日武江を出て
卯月下旬武隈の松を見て桜より三月
越しよりの日数を云て暮春の季に出せる集の趣意

挙白よりみちのく江下りしに　武隈の松を二木と詠人
いかにと問ん事を言贈

春さしや草隈の残りおはしけん

草隈の花も咲しりさして残りふハなる時節の
観想世にもさしける妻と契く調しける菓子に上臈も
ここしかすその母や枝草紙なとさしこにいかとのゝ人の
りく事しられるもあまつさえ是故ある根の下ニたり
数々こともおせこしふさのへ入てすいか勝され
后宮御寄詠人あるひは蝉やさいそく目ありも我なと八君を

志のゝめとも海猫なきわたる

許六か東路におもむくとて

旅人のこゝろにも似よ椎の花

万葉集に　家にあれは笥にもる飯を草枕旅

にしあれは椎の葉にもる　馬上世話にせよる椎森

なりし風雅の細道をたとへて人をいさむるなり

竹酔日

ふらすとも竹植る日は蓑と笠

五雑俎曰　栽竹無時雨過便移多留宿土記

取南枝此妙訣也　俗説五月十三日を竹酔日として

又ハ俗説を指して伝へし又居家必用

五月十八日栽竹及十三日為竹酔日栽之百無

一死頗試実効　竹を植るに篤実此俗説にとしに

しかも風流なり

ちなみ世話志のひて

霜のしら　梅子さゝける　史楠

世を古き時なとも元しらぬ史楠を梅子植る

蓬生ハ西ふくと見ゆまとそのの句とあんなし
古硯り　朝さゆまゆしられ家花多られに記し花さける
かりしをてしこ又出補ゝ画るさを深氏香の溜まる前めて
たとへて梅らえの色乃図の附を梅らし蒿文あそれ
筆の蛍りり附をとみけらゝ倫人寺し書事なま定
として狩出補ゝ種子のうけ合錦く候りに

象潟西行ゆくへあし

夕されや桜らしきも過活の花

独り梅を象潟のこしら耳満寺乃入江を現きて

好の山家集ゝ　象潟のさくらハ浪ふうつまれて花の
うへこぐ蜑の釣りし

夜まても出記月　紫れ一つうね

一ッ葉ゝ菖蒲塔供奴を絵所絵すんよふ足欄の傍漢名
石葦とふるる葉を色句をき枝首りの支枝折れ花さる
物を花ふ折る出つ氣比安な至まざ多絵連の観想なる

江戸の胸めて

蜑の鼓　尖見し渕しや菰子の花

世のたのしさは梅と李子の上に住てゆく庵なりし
終日さへ見えしかなりし江戸の蟹れ何氣なくおもはし
世波よれては梅花都のむかしおもはれ念がれの其
いかなる也撰集物世話の福人發句の其名柳生弟子の
命にしたがひ年々ぎやうく皆筆しあまた此宿業の
つたなしして多難くおりの世は掛をいはれぬ不幸のされ
て此俳人の中にもさいはひして是を能してこの事あれ
世をよそに人多くしても世話に不幸な人あまたし
翁芭蕉常に撰集物の趣を志しひやされなれたのかう
是為の鍾愛とうるなるべし

芦野にて

田一枚うへてたちさる柳かな

芦野ハ下野國にあり　道のへに清水流るゝ柳かげ
しばしとてこそ立とまりつれ　此
哥の心をとりて志をしとゝしてひつきたる田
一枚植るより終まで立去たる趣情也　句法摸写變態口授

江戸　丹風

江戸　寿ろし　理丸筆をとく書写

第一秘曲の調也し 青山也今 仁和寺に
先年竹生嶋の弁才天へ手向の為に神前にて一曲を
かなでける時の人々も感じ侍りし 何れも抑々身の果て
清盛 兼盛の風に管絃の声を賞しく 何れも聞く人
聞ける皆々 海せ一面に 来たる事 露に 志ありて 賞せある

杜若 すがたし 絃のひとつ かな

伊勢との縁に浪の初しほまれなりけるが師の下の納受
豊かその浪に思ふ情をこの節に感じ給へる故
見たる

如し 秋に何あれ 新し 情有は

たゝしくさゐる絃の一すじに残りたれて絃の上に
流を切して引ひける尤筆を自中に書し
絃の音に何とはいかにまことし物ちかの世とも尽
ませんとこそ

山崎宗鑑四句め

何れ如何にと 異相 世に何とそ

宗鑑ハ江州の人也 近江の産 山崎の竹林に隠れて住
ませ給ひく世に有る 又 俳諧もし人志深く 折ふしの時
近衛殿下龍山公 宗鑑か如何なる様をとし 池よの

こともを御覧ゆるして　定雅か写絵見れハ懺悔つまる
こと無し給ひけれも意しらしられて頭の佗すか　定雅
皆うたかふ写色にもあらすとし又定雅か胸語作を離れ
とて懐逍遥ありしされハ□ハ撰者の□懐逍遥の
円成房に給さしを志んに御たつる禅師この胸を
この所よめし給ひ手よ幽翫し給ひまゐらする
此句ハ指埋宏少うして志らも風雅不老せしれるさは
未見繊もそのりめいらん

逍遥子　胴□のあれ墓の声

風雅なりし　故紅庵鉄叟のをくの冬すゝめ　書ハ老季
すれとも　寂々ここは墓のを垂世をしひく
眠蕉伴もあんへたの墓ハ重ゝ清く地しをきやうし
蝸廬のひやゝかにすゝく性しおもふさゝハ見れこひ
ゝやも　文康出居　好出居ハ別の果なすめ

寶曆九己卯六月吉日

芭蕉翁句解

雪中庵蓼太述

洪水に星も旅寝や岩の上

此句ハ詞書に七夕の夜風雨しきりに　遍昭小町か哥を吟せる人あり星も是に似たるあり　岩の上に旅寝をすれハいと寒し苔の衣を我にかさなん 小町　世をそむく苔の衣ハ只ひとへかさねハうとしいさ二人ねん 遍昭
又狂風此歌によりて遍昭の理を是にたとへ　七夕に逢ハなし
猶余録　此句芭蕉撰に入たり　浪の字悠然ト章叢の趣をとくのミ

合歓の木 紫こしといふ草の記

新後拾遺集 七夕の歌とよめるといへるにて一夜のうちに
いひ法くさん合歓をねふりに紫寐をあまたむすひて眠る
なるへく木の緒絡むしの木ときハいつ一夜の縁あり
これハ紫こしといふ草の姓紫の人に与へり

何とし身に秋を経て上もとられ

世をすて鈴虫の声をきくにも細くひ枝を高くして香
をもとむるにつけても鈴虫の白きすゝの写哉とよむ所

むかし京といひし神見えたるといふ 久しきの名の句なる
素見えたり名もなき菊の数ならぬをいはゞ実にやせたる
これを出す事ならし 受

三日 月も暮れ夕ぐれならん

三日月も心をよそに見えし暮るゝに枝
菊をはしめしんといふてなみの手つきせめる巣に
この句を 三日月や野菊の名へつはもしんなる
おせの名を数多の書写の中や伝ゆるよ
なりしん

丹野亭

本宮より定りし髑髏の
留鼓にむつく縫ひしより
画く年暮の望より掛かり

稲妻や都のともしかきえし後

秋風の吹くに清見えと何ありてまことの室に落生
きれ其の響きこえても清かるや

稲清海しさししぬ人おもふなよ

何ぞ禅師のいはく吾化れは今せりと思心兼一觸を
百よみしその一句あるとにといふは實悟をゆるしに
三十棒の後ありし室に大悟して人に悟るを説きせしを
思心念底を清くして一見ありしを

深川の庵を旅立ちしを

秋もせ都て心をさすなん

客舎并州已十霜帰心日夜憶咸陽無端更
渡桑乾水却望并州是故郷よくこの詩の
こゝろに似たり

うつくしく行者けしや女郎花

讀古今集　ひとゝせをもにかる器の事をかすかしくらひ
きのまて有あるらん

見渡せは酒れたるれて浦戸の秋

見渡せはとは定家の浦路の風景を如しくあるは
酒れたるは略筆をかくとひすへし何事もや見れたる六
浦戸の眺望をいふなるへし古き讀花の句のまゝ
ふりぬるは南無阿弥陀して調し出しきはしかや

空也の月やゝの御坊

空也念仏とはいやしき名なれとも世にいふところ也　紀
念仏とのまをこゝろ　西上人　撰不山家集の詞を志るし古き書の
鉢扣の文にも書りし　曾空也無水之地多穿井
〻心并念以其常唱弥陀号俗名弥陀井往々而
在焉荒原曠野毎逢遺骨据聚一處念弥陀
名ありて世の人のことさ坊ならて文市上
人よりいつ空白中此あるとき坊こそ此
もの也

名月や池をめくりて夜もすから

此句を翁としてこゝろ云はゝ　芭蕉庵一夜之佳興
なれ有れは外を行のかへる節やうし
さしおもかけ立て色ともなる詩をうたひ出　以
来天としめりて池をおもてを出て志すものをなかし
宮も古ひ雨にふれて暁の士峯に光をおさめて
物其半端も録をつくのかゝく月のかしきのまこゝ
海の音ましも霜をあおるに色ものくれた
云用大奈としし高き人を行きをはなし我事を

古ひ音にかの細管にて古翁の形骨をまうしたる名けて
李老荘の手ふし有るにもこひ浮に秋さん志すくへし
絶りせう名見えましかなす事勤し侍る

絆管の名利智拙侍る風
荘子ハ斗斛成而天下人始争これらをしかるに
絆管のハまのそうる事をこひ隠士の名利のかはる
所をしかる所しかれ出しもとて微なる情をも覚し

名月やめくりし時しらぬ都かな

回頭一笑百媚生六宮粉黛無顔色とくこの
らうたしやすくなりけり

蓑虫庵

今宵誰よしのの月も十六里

新古今集　さ月まし篠ふく風に夢をさまし
よしの嶽に月をみんと蓑虫庵主祖翁の古人伊賀
の山中なる此句の十六里を山中より吉野迄の程也

月さひよ明智か妻の咄せん

此句の絶せたに伊勢国に至り亮のまていあられ侍りし比其妻の
男の別れしくちく伊賀やうに見えはれた旅の心をあ
くしは侍りぬ行自向の妻女髪を切し扉をまたまれ
し事を今更申せてしれのさして推移の比を思ひて絶
立ると略せ六句ありけり候事。其他く被見よりあちを比さ

来周亭

隠家や葉かくれにした田三友

山居せは向三夜味噌八升小者せ〳〵に水の仕切りも
一体得作家し其の来周ハ東湖大姫の作りの季の終

師の門人会して芭蕉翁と称しけり

菊の後大根の外さらになし

不下是花中偏ニ愛上菊 此花開テ後更ニ無シ花とある

こゝろにかよへりしかとの余情おもひやるへし